

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2019年11月16日
文責：JUN

子どもが生みだすものの素晴らしさ！

学ぶのは子どもです。ですから、私たち教師は、教師がどう授業したかではなく、子どもがどう学んだかをつぶさに見なければなりません。そして、子どもが生みだすものの素晴らしさを心から味わい大切にしなければなりません。

しかし、多くの教師は、どう授業するかに目を向けがちです。「学び合う学び」に関心の深い教師でさえ、この傾向から脱却できないでいる、そう思います。

ペアやグループで子ども同士が学び合う場を設定している教師からこんな質問が出るのがたびたびあります。

「ペアやグループを入れるタイミング、そして切り上げるタイミングがわかりません」

私に言わせれば、このように考える時点で、子どもを見ようとしていない、そしてどう授業をするかという考え方から抜け出せていないのだと思います。本気になって、すべての子どもの事実を目を向けていたら、その判断は頭の中に降りてきます。もし、懸命になって子どもの学びに心を砕いても降りてこなかったら、「どうしたらタイミングがわかるのか」と方法的に考えるのではなく、まだまだ事実の見方が甘いのだと悟り、もっともっと子どもの事実を見るように努めるようにしなければと思うでしょう。だれだって最初からはみえないのですから。「みる」「みつめる」「目を凝らす」という経験的事実を積み重ねることなしに、判断が降りる状態は生まれないのですから。

8月1日発行で上梓した、私の新刊『「対話的学び」をつくる一聴き合い学び合う授業』は、徹底して対話的に学び合う子どもの事実を記した書です。186ページに及ぶこの書の3分の2は、教師がどう授業したかではなく、子どもがどう対話的に学び合ったかを記しているのですから。

この書が世に出てから3か月、私は、本書がどれだけ教師である皆さんに受け入れられるかをじっと見守っています。もし、指導の仕方を求めている教師なら、この本は退屈なものにちがいません。そうではなく、子どもの学びの事実を味わおうとする教師なら、共感、疑問、批判、そのどれであっても興味深く読んでくださるでしょう。私は、私の勝手な思惑で、思い上がりを承知で、この書にどれだけの反響があるかどうかで、子どもの学びに目を向ける教師がどれだけいて、その実践がどれだけ進んでいるのかがわかるのではないかと考えています。もちろん、私の筆力が足りないということもあるでしょう。それでも、日本の教師たちの目が、少しでも子どもの学びに向いていたら、それなりの反響が届くと思っています。

子どもの学びの事実は、教室の片隅でひっそりと生まれるものもあり、それはささやかな小さな出来事です。けれども、そのささやかな、取るに足らないような事実、学びの神髄があるのです。それがわからないようでは子どもの学びは深まらないどころか生まれないかもしれません。

今号には、次々とめぐる教室の参観において、私自身が心引きつけられた「子どもの生みだすもの」についてお伝えしたいと思います。子どもの生みだすものの素晴らしさを知っていただくために。

1 子どもから読みが生まれる感動！

それは、小学校5年、「大造じいさんとガン」という物語を読む授業でのことでした。

授業が終わって校長室に戻る歩を進めながら、並んで歩く、その学校のA校長に私は思わず話かけました。「子どもたちも、先生も、よくやりましたね！」と。A校長も同感だったらしく、強くなずいておられます。授業をしたのは教師になってまだ4年目の若いKさん。

子どもたちは、45分間、最初から最後まですべての子どもが前向きに学び切りました。グループではどの子どもも自分の読みを語り、仲間の言葉に耳を傾けていました。教師になって3年間低学年担任が多かったKさんはこれまでこのようなグループで学び合う授業づくりはしてこなかったそうです。にもかかわらず、たった半年でこの状態にしたのです。たいしたものです。

全体学習でKさんが多くを語らず、子どもたちの考えを聴くことを大切にすることも特筆ものでした。先生が聴いてくれる、子どもたちにとってそれ以上うれしいことはありません。男子も女子もかわりなく、何人もの子どもが自らの読みを語りました。

教師として出過ぎず、子どもたちの読みに真摯に耳を傾けたKさんと、そんなKさんに応えるかのように意欲的に学び切った子どもたちの45分は、一服の清涼感を私に与えてくれました。

しかし、私が本当に感動したのは、そういう授業の雰囲気だけのことではありません。子どもたちが語ったこの物語の読みの見事さに感動したのです。先生に教えられるのではなく、子どもの内から、子どもの心の動きによって読みが生まれる、その事実の素晴らしさに感動したのです。

私の心を強く揺さぶった子どもの読みは、挙手し先生からの指名を受けて語ったものではありません。全く、突然、ふっと子どもの口から漏れ出たものでした。

もちろん、指名を受けて発言として語られたものも、この物語の読みとしてしっかりしたものだったし、それが、先生に細かい指示とか説明とかを受けて語ったのではなく、子どもそれぞれが自ら読んだことを語ったものだったのですから、子どもは、教えられなくてもこれだけの読みが出来るのだという感動をもたらしてくれました。けれども、思わず、子どもの口から漏れ出たものほど、子どもの読みへの思い、夢中さ、真実を表すものはないのではないのでしょうか。

一人目のつぶやき、それは、一人の子どもが「大造じいさんは、今年こそ残雪を撃てると、そういう気しかしなくて、撃てないという気はしてなかった」と発言したときでした。私の目の前に座っていたOという子どもが呟いたのです。

「自信あり……や」

そこまで、子どもたちは、「班で聴き合ひましよう」という先生の指示を受けてグループになって互いの読みを出し合い聴き合い、その後、読みを深めるため全員で学び合っていました。

子どもたちが、出してきたのは、「小屋の中に流れこんできたあかつきの光」でじいさんがやる気になっていること、ぬま地にやってくるガンの群れに先頭にいる残雪がじいさんに見えたこと、「ほおがびりびりするほど引きしまった」大造じいさんの緊張感、「またしても残雪のためにしてやられてしまった」じいさんの悔しさなど、この場面の大事なところを次々と出してきたのです。そんななかから「撃てる気しかしない」という前述した発言が出て、その瞬間、Oさんの「自信あり……

や」という一言が飛び出したのです。

夏のうちからタニシを集め、それをガンの好みそうな場所にばらまき、ガンたちが食べていることがわかって4、5日後、会心の笑みをもらしたじいさんは小屋を作ってそこにもぐりこみ、ガンたちがやってくるのを待っていました。あかつきのひかりがすがすがしく流れこんでくる、やがて群れがぐんぐんやってくる、「しめたぞ」そう思うじいさん。そういったここまでの状況から、「撃てる気かしない」というじいさんの状況が語られ、それを聴いたOさんに、そのとき「自信」を抱いたじいさんの気持ちがぱっと感じられたということなのになにがありません。

二人目のつぶやき、それは、K先生が「だから、こうやって悔しい思いをしたんやな、だから『ううん』ってうなったんやな」と言って45分に及ぶ研究授業を締めくくろうとしたその瞬間に生まれたものでした。

「なんで『ううん』なんやろ？」

子どもたちは、「もう少しでたまのとどきよりに入ってくる、というところで、またしても、残雪のためにしてやられてしまいました」という文から、何人もの子どもが大造じいさんの「悔しさ」「残念さ」を語っていたのです。だから、K先生は、その「悔しさ」でこの時間の読みの結晶点にされたのです。子どもの読みを大切にしているK先生としてそれは妥当なことでした。

先生は、その締めくくりの言葉に、何気なくだろうと思うのですが、「だから『ううん』ってうなったんやな」という言葉をつけたのです。それは、物語に「大造じいさんは、広いぬま地の向こうをじっと見つめたまま、『ううん。』と、うなってしまうました。」と書かれているからです。だから、子どもたちは、この「ううん。」に「悔しさ」を感じたのだと受け取っておられたからでしょう。その先生の感じ方もよく理解できます。

ところが、その瞬間、Tという子どもが、前述の「なんで『ううん』なんやろ？」というつぶやきを発したのです。

それまで子どもたちは、大造じいさんは悔しいと思っていると読んでいました。実は、Tさんもそう読んでいたのです。というのは、「なんで『ううん』なんやろ？」とつぶやいたたった10分前に、彼がその「悔しさ」を語っていたからです。「今まで、夏の間から5俵もタニシを集めたのに、残雪がいたせいで、沼地より離れたところに行ったから悔しかった」というように。

そのTさんが、K先生の締めくくりの言葉を耳にした瞬間、「悔しい」という気持ちと「ううん。」というじいさんのうなりとが、なんだか一つにならないという違和感を覚えたのです。

教師に指示を受けて挙手をして発言する、そこでも子どもたちは十分に自分たちの読みを語っているし、聴き合ってもいます。けれども、挙手をし、指名を受けて立って、聴いてくれる仲間や先生に対して話すということは、それなりの意識を子どもにもたらします。きちんとわかるように話さなければ、頑張って発表しようといった前向きな気持ちを持つ子どももいれば、うまく話せるだろうかと心配しつつ話す子どももいるでしょう。場合によっては、恥ずかしいけど、自信がないけど、発表しないといけないから…というようにドキドキする思いを抱いている子どももいるでしょう。K先生の場合はそういうことはなかったのですが、先生がとにかく発表しなさいと言うから仕方なく手を挙げようと思っている子どももいるのです。つまり、そういうときの子どもは、純粹に物語の読みのことだけで頭をいっぱいにはしているのではなく、授業を受ける自分のあり方ということに心を使っている

のです。

それに対して、ここで取り上げた二人の子どもの「つぶやき」はどうでしょうか。もちろん、これは、のべつまくなし、しゃべり続けている「おしゃべり」ではありません。OさんとTさんが、仲間の言葉、先生の言葉を聴いていて、ぱっと口から漏れ出た一言です。そこには、余分なこと、別のことへの意識はありません。ただ、純粹に、物語を味わっているなかで生まれてきたものなのです。私は、これ以上、子どもの読みの真実はないだろうと思っています。

教師が発問し、誘導する授業では、ほとんどこういう優れたつぶやきは出てきません。子どもが自ら物語を読もうとしている授業にしか、そうなるように心掛けている教師の授業にしか、出てこないのです。

授業が終わってから、私は、改めてこの二つのつぶやきを噛みしめました。すると、この二つが出された素晴らしさは当初感じていた以上のものであったことを発見し、なんだか震えるような思いが湧いてきました。それは、「自信あり」と「なんで『ううん』なんやろ？」のつながりがどんなに深いものであったかを感じたからでした。

じいさんは自信を抱いていた、きっと、きっと、今度こそはうまくいく、それは、長年、残雪に挑んできた獵師としての意地であり、誇りでしょう。獵師として生きる自らのすべてを残雪への挑みに賭けてきたじいさん、その象徴としての「自信」だったと考えられます。その「自信」があったとしたら、獵師としての誇りをかけて湧き起こしていた「自信」だったとしたら、「ううん」は、単なる「悔しさ」では済まないのではないかと、授業終了間際のTさんのつぶやきの正体はそういうことだったのではないのでしょうか。

こうして、OさんとTさんの二つのつぶやきは、必然的につながり、この場面の大造じいさんの思いの深さを表していた、それが子どもから生まれ出たものだったのです。

子どもはすごいです。

子どもはここまで読んでくるのです。

そんな子どもに、浅い解釈で立ち向かうことはできません。ましてや、その浅い解釈を教えてしまったら子どもの可能性をつぶすことになります。

私の感動は、こういう感動だったのです。

もちろん、OさんとTさんの読みをどのように他の子どもたちに伝え、この二人の子どものつぶやきからどの子どもも学べるようにしていくか、という授業のあり方については考えていかなければなりません。そうでないと、こういう子どもの可能性を生かすことにならないからです。

けれども、まずは、こういう子どもの読みが生まれる授業にしなければならないのではないのでしょうか。それをまだ教師になって4年目の若い先生が実現したのです。そのことは、どれだけ称賛してもし切れるものではありません。

この学校の授業研究に、私は、この日、はじめて参加しました。そして、こんな素晴らしい出来事に出会うことができました。本当にうれしいことです。K先生に感謝です。

2 寄り添うかわり子どもは成長する！

すべての子どもの学びを保障する、これは「学び合う学び」の中心理念です。

「学び」は一人ひとりに生まれるものでなければなりません。グループで一つの解答を見つけるとか、いくつかある考えをグループの考えとして一つにまとめるとかすることは、教科の学習において基本的には考えられないことです。

けれども、たった一人では学びは深まりません。わからなくなることや間違っただけの考えに陥ることはあるし、間違っただけの考え方があるということもだれにだってあります。そのようなとき必要なのは、聴き合い学び合い支え合うことのできる他者です。他者がいることで、自らの考えを確立し自分自身を発揮していくために、一人ひとりが学びを進め深めることができます。それは、大きく言えば生きてゆくことができるということです。「学び合う学び」は、すべての子どもが学び生きてゆくために、なくてはならない行為なのです。

学校訪問を行うたび、私は、いくつもの教室を訪れ、そこでさまざまな教師と子どもの学びの姿を目にしています。そういう日々を送っていると、「ああ、『学び合う学び』で、この子が学んでいる」「あの子どもの表情が変わった」「こっちの子どもがうれしそうに語るようになった」、そう感じる瞬間に度々出会います。そのとき、私の心はうれしさにふるえます。

D小学校は、学び合う学びに取り組み始めて5年になる学校です。先日、そのD小を訪問し、各学級の授業を参観しました。そして、「学び合う学び」によってすべての子どもが学べる、という決定的瞬間に出会ったのです。

3年生の教室でした。授業が始まって間もなく、なんとなく目が虚ろな一人の男の子が気になりました。学びに全く参加していないのではないのです。授業をする先生の言葉は聴いています。やらなければいけないことに向き合ってもいます。けれども、ふっと顔を上げ、宙を見つめるのです。どうやら、今、考えなければいけないことがよくわからないようです。だから、どうしてよいかわからなくなっていて遠くを見るような眼をしたのです。

しばらくして、先生から新しい問いが出て、今度はペアで取り組むことになりました。この子どものペアは、前の席の女の子でした。その子が、椅子を回転させて男の子のほうを向きました。そして、何か話しかけました。その瞬間、男の子の表情が一変したのです。それを見た私は、もっとこの子のことをよく見たくなくて、一歩二歩と二人の子どもに近づきました。

この後、私は、その子どもが魅力的に次々と表情を変化させるのを目の当たりにしたのです。そして、彼の考え込む表情、にっこり微笑む表情、目を輝かせて聴き入る表情、そのどれもが私を魅了してくれました。

男の子の表情をこんなにも素敵なものにしたのは確実にペアの相手の女の子でした。この女の子とペアにならなかつたら、彼の表情はこんなにも輝かなかつた、それは確かなことでした。

ところが、私の感動をこれだけではありませんでした。その後参観した6年生の教室で、再び劇的な場面を目にすることになったのです。

それは、ALTと担任との二人で行う外国語（英語）の授業でした。その授業に二人の特別支援学

級の子どもが参加していました。2人のやや後ろには特別支援学級の先生が椅子に座り、授業の進行に従って、二人の学びを支えておられました。

ところが、授業の半ばにさしかかったころから、次第に二人の体がそわそわし出しました。特別支援学級の先生がしきりに話しかけ、二人の気持ちを高めようとされるのですが、どうやら疲れてきたようです。

そうした二人の様子を察したからでしょうか、担任の先生は、ここで、ペアで取り組む学びをいれました。

するとどうでしょうか。2人の前に坐った女の子が二人に顔を近づけ一言二言話しかけると、二人の表情がぱっと輝いたのです。英語の授業ですから、もちろんこのペア活動は英語での会話です。女の子は、どう話せばよいか、やわらかくにこやかな表情で助け舟を出しています。すると、二人の子どもは、それぞれに、それまでにはない生き生きした表情で話しているのです。

3年生と6年生の教室で生まれたこと、それは、私にはとてつもなく大切なことに思えました。私が目にしたのは、教室の片隅で生まれた小さな小さな出来事です。けれども、何人もの子どもが学ぶ学校教育において、これほど大切なことはないのではないのでしょうか。

学校は、登校してくるすべての子どもの学びを保障する場でなければなりません。そして、すべての子どもの生き方の礎を築く場でなければなりません。違いや能力に関係なく、すべての子どもの尊厳が守られ、人と人とがともに生きていくそのあり方を学ぶ場でなければなりません。

けれども、多くの子どもがともに生活し学ぶ教室という所で生まれる事柄は多様であり複雑であり、それへの対処に困難を極めることがたびたびです。しかし、その困難さのなかから劇的なドラマが生まれることがあるのです。そんなときそのほとんどが、子ども相互の関係において心揺さぶられるつながりがあるのです。寄り添うかわりがあるのです。子どもは、子ども同士でかわり合い寄り添い合うことによって豊かに成長していけるのです。私が「学び合う学び」の大事さを訴え続けているのは、まさにそのように思っているからです。

この日私が目にした二つの事実は、授業の中にペアによる学び合いを入れるということを授業者の教師が組み込まなかったら生まれなかったことです。特に、後者の事例は、特別支援学級の先生だけでは成しえなかったことが、ペアの子どもによって成しえた瞬間でした。子どもと子どものかかわりは、教師のかかわりよりも大きな効果を発揮することもあるのです。

子どもの生みだすものは素晴らしいです。

子ども同士のかかわりを過小評価してはなりません。

自分がなんとかしなければと夢中になって子どもにかかわる教師がいますが、その熱意への敬意を抱きながらも、子どもと子どものつながりに託し、見守り、支えるということはやはり大切なことなのだと思います。子どもたちにこうした経験を保障することで、子どもたちの将来のより良い人間関係が築かれるのだと思うと、教師は心しなければならぬことなのになににちがいません。